

大阪バスケットボール協会における指導者講習会の変遷

桑原啓樹

キーワード：大阪府，バスケットボール，指導者講習会，発展

1. 研究の動機

これまでに会った多くの指導者には必ずと言って良いほど指導理念や思想があり、それは単に技術や戦術の指導をするだけのものではなかった。そして大阪府では他府県にはない講習会が実施されてきたことがわかった。そこで筆者は、大阪府ではどのような想いで講習会が変化してきたのかについて興味を持った。また、他府県に影響を与えてきたもの、逆に全国で行われているものに独自性を加えてきたものがある可能性が高いと考え本研究を始めるに至った。

2. 研究の目的と意義

大阪府で実施された講習会の背景、実態、そしてその独自性、さらにそれが日本バスケットボール協会における指導制度や指導理念に与えた影響について明らかにすることを本研究の目的とする。また、大阪バスケットボール協会が発信してきた内容および信念を明らかにすることで、全国的な統括組織と地域的な組織との相互扶助を促す一助となることを意義とする。

3. 先行研究の検討

指導について述べられているものは見られたが、各制度の内容や課題点を明らかにするものであり、通史的に統括組織である日本バスケットボール協会の制度確立と各都道府県講習会の取り組みについて記述しているものはなかった。

三原(2005)は今後発展を続けるであろう「日本オリジナルバスケットボールとはいかなるものか」を明らかにしており、蔵元(2013)はサッカーの一貫指導に着目し、選手の発掘・育成・指導者養成の面から、バスケットボールのエンデバー制度を明らかにしている。

4. 研究の課題と方法

本研究では、協会の機関誌や議事録、新聞記

事といった史料を用いて、以下の時期区分に従って、講習会の変遷を明らかにしていく。

1) 大阪府におけるバスケットボールの創始と普及(1894～1974)

2) 指導者講習会の見直し期(1977～2000)

3) 指導者講習会の発展期(2002～)

1894年に大阪府においてはじめてバスケットボールが誕生してから協会が設立する1)の時期と、1977年に検討が始まった社会体育指導者資格付与制度をきっかけとして大阪府で講習会の見直しが行われた2)の時期で大きな変化があると考えた。また、講習会が発展し独自性のある指導法やクリニックで全国にも影響を与えた2002年以降3)の時期にも大きな変化があると考えこのように3つの時期に区分した。

5. 本論

5.1. 大阪府におけるバスケットボールの創始と普及

大阪府では1891年から1894年米国に留学していた成瀬仁蔵が1894年から梅花女学校にて初のバスケットボール指導を始める。生徒が自ら学び、実用性重視の教育方法を取り入れた。その後、1913年に米国YMCAからF,Hブラウンが来日し、大阪でも指導をしたことにより普及を始める。そして、1931年に大日本バスケットボール協会大阪支部が設立、1935年には大阪バスケットボール協会が発足する。協会の指導方針としてはパス・ドリブル・シュート・リバウンド・スクリーン・ディフェンスといった基礎技術をすべてマスターしオールラウンドプレイヤーとなることが目標であるが、それは実際のところ難しいため1つ何か得意技・武器を持つべきであるとされた。その中でも特に重要な技術はシュート力であるとされ、

シュートに関する哲学を持つべきであり、練習はシュート練習から初めてシュート練習で終わるべきとされた。また、パトカーのように敏速・ダイナマイトのような爆発力と言った表現が使われ、派手なプレーも目指されていた。

5.2.指導者講習会の見直し期

1986年に日本体育協会によって開始された社会体育指導者資格付与制度に伴って日本バスケットボール協会も指導者養成に取り組んだが、全国で36,000のバスケットボールチーム中、公認指導者は620人という状況であった。そこで大阪府は日本体育協会公認C級スポーツ指導員養成講習会の開始に踏み切った。次に、資格取得者の有効活用を図り、選手の底辺拡大を行うため、なみはやドームを中心に府下8ヶ所にスポーツクラブを開設し、世代の枠を超えた一貫された指導を目指していく。なみはやクラブで指導をしてきた北口良平はバスケットボールの楽しさを子どもたちに伝えるファーストコーチになり、人生を少しでも変え、成長を促すようなコーチになりたいという強い指導理念を持っていた。C級スポーツ指導員養成講習会やなみはやクラブは、2000年度に日本バスケットボール協会が創設した公認指導員資格に影響を与える。戦術・技術の指導だけではなく、バスケットボールを通しての人間的成長、部活動を引退した後のことまで考える指導が心掛けられていた。

5.3 指導者講習会の発展期

2002年のエンデバー制度確立後、大阪府ではOBTAやドリルクリニックを実施し、一貫指導の構築を目指した。OBTAでは、OBTAオリジナルバスケットボールが定義されており、基礎技術を徹底的に習得し、その上で日本人の繊細・緻密である特性を活かし、質・こだわりの高い合理的かつ組織的なバスケットの実現に向けて講習が実施されている。講習では“9+1+B+G”、“協力は強力”、“コーチとは大切な人を目的地に導く人のこと”などの標語があげられており、独自性を感じることができた。OBTA

では各地区で選抜した選手をモデルとする。一貫指導において上から下に情報を伝え、底辺を拡充することは、逆にすべての選手が上に挑戦する機会にもなった。このような大阪府の中学・高校生の育成制度は全国でも採用され、日本バスケットボール協会は2018年に各都道府県や地区に育成センター設置を義務付けた。ファンダメンタルを徹底する点やすべての中学・高校生の選手に高いレベルへの挑戦権を与え、指導する側が一丸となって選手を育成していくという考え方には2015年大阪府で開始したOBTAが大きく影響していると考えられている。

6.結論

大阪府における講習会は日本バスケットボール協会の制度確立のために参考とされている部分が多い。また、全国で行われている制度においても、日本人の心は幕の内弁当・楽しさを教えるファーストコーチ・バスケットを通して人間的成長・協力は強力・9+1+B+Gのように、独特な表現や独自性を加えた指導方法が大阪府では実施されてきており、その根底には指導者が一丸となってみんなで選手を育てたいという指導者の熱い心やバスケットボールに対するあくなき向上心と情熱が感じられた。つまり、統括組織である日本バスケットボール協会と地方協会や各現場の指導者との相互作用で講習会や指導体制は確立されてきた。今後、日本バスケットボール界が発展していく上で、全国的な統括組織のみではなく各都道府県の地域性を持った考え方や指導理念も大いに貢献していくだろう。

一方で、協会だけではなく、行政、プロチームや実業団チーム、また、他競技の協会や関係者など様々な力の複合的要素の上で、現在の講習会や指導論が確立されたと推測することができる。それらにはバスケットボール協会側とは別の思いがあったとも予想される。よって、より多角的に講習会や指導論を評価することを今後の課題とする。

(指導教員

秋元忍)